

り、多くの貴族たちが出入りするようになると、一般の人々も多く集まるようになり、平安京と一体化して「京・白河」と称される副都心が形成された。

中世に入り武士の時代になると、院政期を代表するこれらの寺院建築群は徐々に姿を消していき、その後近世にかけては、平安京の近郊農村地としての役割を担うとともに、東海道の交通の要衝の地としての性格も持つようになった。一方で、室町時代には、亀山上皇によって創建された南禅寺が京都五山の上に置かれ、五山文化の中心地としての側面もあった。なお、江戸時代には、現在の清風荘の前身である清風館が徳大寺家の別邸として建設されている。

幕末になると、平安京がにわかに政治の中心地としての色合いを帯び、郊外であるこの地にも、大規模な藩邸が多く建設された。尾張徳川屋敷が後の京都帝国大学となる等、これらの藩邸の地が明治以降様々な施設の地として利用されていく。

(イ) 近代化とうるおいをもたらす琵琶湖疏水



図2-61-2 琵琶湖疏水

そして明治時代に入り、白河（岡崎・吉田）は大規模な開発が行われ、京都の近代化にとって大きな役割を果たすことになる。京都は、琵琶湖疏水に代表される近代歴史遺産の宝庫でもあり、この先進の自負が、京都に暮らす人々にとって誇りであり、心の拠り所のひとつにもなっている。

琵琶湖疏水は、明治維新による東京遷都で衰退した京都に活力を呼び戻すため、近代化策（京都策）の事業の一環として、明治23年（1890）に建設された。京都にとって、琵琶湖から水を引くことは長年の夢であった。その後、明治45年（1912）には、第二琵琶湖疏水が建設され、水道事業や市電敷設等が行われ、今日における京都の近代的まちづくりの基礎となるとともに、東山山麓の持つ豊かな自然環境と疏水の豊富な水量を利用した南禅寺界隈の邸宅群が形成されていった。

イ 具体事例

(7) 琵琶湖疏水と邸宅群



図2-61-3 琵琶湖疏水と邸宅群

琵琶湖疏水は、琵琶湖取水地点から伏見区堀詰町で一級河川濠川となる地点までの「第1疏水」、第1疏水取水地点の少し北側から全線トンネルで蹴上付近で第1疏水と合流する「第2疏水」、第2疏水取水口付近の立坑から全線トンネルで安朱で第2疏水に合流する「第2疏水連絡トンネル」及び蹴上付近から分岐して左京区北白川久保田町に至る「疏水分線」からなっている。

現在、琵琶湖疏水は水道原水のほか、発電、かんがい、防火及び工業などに利用されており、市民の生活になくてはならないものである。また、琵琶湖疏水の建設に伴い整備された、蹴上発電所や蹴上浄水場、インクライン等の関連施設は近代化産業遺産としての認定を受けるなど、京都の近